

# 「50年超える研究 評価」

## アーベル賞・柏原特任教授

「数学のノーベル賞」とも呼ばれる「アーベル賞」の日本人初受賞が決まった京都大数理解析研究所（数理研）の柏原正樹・特任教授（78）が27日、京都市の京都大で「50年を超える研究全体が評価されたと思う。多くの共同研究者に感謝したい」と喜びを語った。

柏原さんは東京大の大学院生だった1970年、微分方程式を使いこなす手段として恩師が提唱した理論「D加群」を確立させ、修士論文にまとめた。D加群は代数や幾何、解析など数学の各分野を橋渡しし、その後、素粒子物理学などにも応用されるようになった。

記者会見で、10歳の頃に「つるかめ算」を知って数



記者会見で笑顔を見せる京都大数理解析研究所の柏原正樹・特任教授（27日午後、京都市左京区の京都大で）＝川崎公太撮影

学に目覚めたというエピソードについて問われると、苦笑しながら「百科事典でつるかめ算を調べたら、（代数の）XとYで簡単に解けることがわかり、その後の数学への興味につながったのかな」と記憶をたどった。

数学については「一言で言えば美しい。僕にとって音楽のようなものだ。面白い発想で新しい物を創造することが大事だ」と語り、「受験の影響か、『記憶力が必要な学問だ』と誤解している子どもたちが多いと聞くが、そうではない」と強調した。

同僚たちからも祝福の声が上がった。大学周辺の中華料理店などでよく柏原さんと昼食を一緒にしていたという数理研の向井茂・特任教授（71）（代数幾何学）は「柏原さんの研究室はいつも少しドアが開いていて、鉛筆の音が聞こえていた」と振り返り、「日本の数学界が世界的に評価されていることを多くの人に知ってもらおうきっかけになれば」と喜んだ。